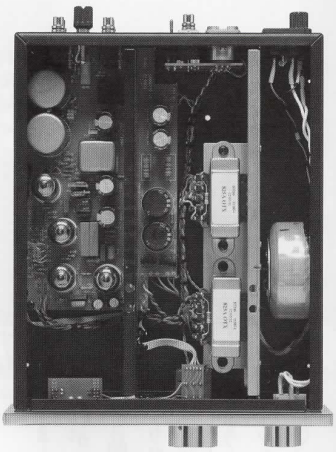
入力端子2系統を装備。MC／MM切替えスイッチをリアに配する。出力端子はRCAアンバランスとXLRバランスを装備し、スイッチで切り替える。



双3極管PCC88を片チャンネルあたり2本用いた4段構成。基板右に見える出力トランスなどトランス類は自社設計品。

EAR
EAR88PB

¥689,000

●入力端子:MC／MM1系統(RCAアンバランス、切替え)、MM1系統(RCAアンバランス)●入力感度:0.25mV(MC)、2.5mV(MM)●入力インピーダンス:4Ω／40Ω(MC、出荷時に設定)、47kΩ(MM)●出力端子:1系統(RCAアンバランス／XLRバランス、スイッチ切替え)●使用真空管:PCC88/7DJ8×4●W235×H100×D290／6kg

●問合せ先:ヨシノトレーディング(株)☎050(3375)3975

【回路解説】

パラヴィチーニ氏の傑作機のひとつといわれる真空管式コントロールアンプのフラッグシップ機EAR912の高品位なフォノイコライザーステージを独立させたモデルである。増幅回路は、双3極管PCC88／7DJ8を片チャンネルあたり2本使った4段構成でフォノイコライザーはNF型だ。また、カートリッジはMM、MC両タイプに対応する。なお、MCの昇圧は氏自らがデザインしたという、内蔵の高性能なオリジナルトランスで行なう仕組みだ。一方、出力はバランス、アンバランス各1系統を備え双方はスイッチで切り替えられる。このほか、ボリュウムを装備しているのでプリアンプなどにつないで歪み抑制のためのゲインコントロールとして使えるほか、直接パワーアンプに接続して楽しむこともできる。(篠田)

スタジオ機器設計のノウハウも注入して双3極管PCC88の4段構成で組む。演奏の細部を克明、しなやかに描写する立体的で彫りの深い、巧みな音楽表現

篠田　ブランドを主宰するティム・デ・パラヴィチーニ氏の設計です。増幅部は双3極管PCC88／7DJ8を2本使った4段構成で、イコライザー回路はNF型です。自社設計のMC昇圧トランスを内蔵しています。

楽器やヴォーカルの音像をしっかりと明確に出すのが印象的です。それにしなやかな弾みを伴った躍動感のある鳴り方でもあります。ここはなかなか好ましい。パラヴィチーニ氏は、スタジオの録音再生機材の設計を数多く手掛け、そうした経験で得た技術や考え方が製品に活かされるんでしょうね。本機も、プロフェッショナルの現場にも通じるような、的を射た音作りと感じました。

東条　同感です。敢えていうならば、「中庸を得た壮麗さ」というような形容もできそうな表現です。バランスもいいですね。

「王宮の花火」が、まさにそういう壮麗な再現を感じさせました。ティンパニが力強く堂々と出て、スケールが大きいんです。そうでありながら、内声部がはっきりと聴き取れます。ホールの響きもしっかりと表現します。こういう響きのよさの中で内声部をはっきりと出すのは、なかなか難しいんですよ。木管の分離もよく、秀逸な表現力を感じます。音楽を面白く聴かせてくれますよ。

篠田　音楽の強弱や、明るい部分と陰りの部分のコントラストの付け方がうまいと思うんです。ですから、オーケストラに立体感があります。また、東条さんがおっしゃるように、響きがよく、音場の表現も豊かです。

東条　演奏の立体感を巧みに表現します。響きが豊かで、内声部の分離がいい。それがすなわち、立体感につながるんですね。

「ケンペ」もバランスのいい再生でした。ヴァイオリンがはっきりと出て、演奏全体がクリアーで明るいんです。明朗、明快なチューリヒ・トーンハレ管弦楽団でした。

篠田　細部を、きめこまかく再現しているということですか。

東条　ええ。しかもバランスがいい。

篠田　細部まで克明に写し出した銀塩写真のような、どちらかといえば硬質なオーケストラという感じです。もう少し緩めてもいいんじゃないかと思えるくらいの、カチッとした表現の仕方だと思います。ですから、だらしなく緩むようなところはほとんどありません。ピーンと張り詰めた空気の中に、威厳や荘厳そしてある種の緊張感を覚えるシンフォニーが聴けました。

東条　「シェリー・マン」は、どの楽器も節度があってバランスよく鳴り、シンフォニックな響きを感じさせます。演奏が盛り上がった後に出てくるサックスのソロが、くっきりと、スッと浮き上がってきます。この部分は、音が少しぼやけるモデルと、スッと浮き上がらせてくれるモデルとにわかれるように思うんですよ。なかでも、本機の再現には好ましさを感じます。

篠田　トランペット、トロンボーン、チューバなどブラスが掛け合いで歌っている部分があるんですが、シェリー・マンのドラムスがその間で演奏の微妙なバランスを取るという、リーダーの仕事がそれこそ手に取るように再現されます。この音楽の面白さを巧みに引っ張り出す能力は見事。そんなところに設計の妙が聴き取れます。

東条　先程、「中庸を得ている」といいましたが、それは、おのおのが自分勝手ばらばらに演奏するのでなく、周りと息の合った絶妙な掛け合いを繰り広げている様子をうまく再生してくれるからこそ、そう聴こえるんでしょうね。そのバランスが絶妙です。

「ドリス・デイ」も、まさに「中庸を得た表現」のひとことですね。

篠田　私も、「こういう感じだな」と頷かせてくれるような再現と聴きました。ヴォーカルとバックの演奏との掛け合い、お互いの「間」がいいんですよ。音作りのバランスがいいんでしょうね。

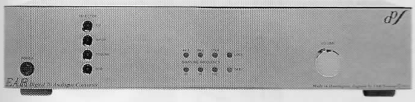
東条　明晰な再現だったと思います。

アイソレーション・トランスを使用するなど EARらしい独創的なアナログ回路を搭載。プロ機にも繋がる色濃い音と壮大なスケール感

角田郁雄

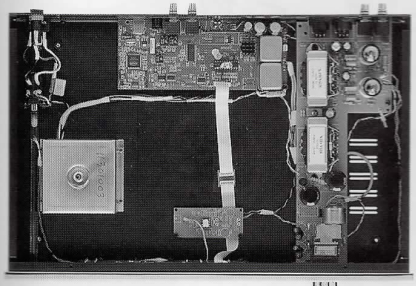
EAR *DACute* ¥798,000

●デジタル入力:4系統(RCA同軸×2、TOS光×1、USB×1)●アナログ出力:2系統(RCAアンバランス、XLRバランス)●出力レベル:5Vrms●対応サンプリング周波数/ビット数:44.1kHz〜192kHz/24bit(TOS光は96kHzまで)●使用真空管:PCC88/6DJ8×2●寸法/重量:W435×H95×D320mm/7kg●備考:リモコン付属。表示価格はChrome仕様、Black仕様(¥728,000)あり●問合せ先:ヨシノトレーディング(株)☎050(3375)3975



クローム仕上げのシンプルなパネル。セレクターは4系統。中央のランプはロックしているサンプリング周波数を示す。パワーアンプを直接つなげるように、アナログボリュウムも装備する。

本機には出力トランスが搭載されているが、RCAアンバランス出力も出力トランスを通る。USB端子、RCA端子は192kHz/24bit、TOS光は96kHz/24bitまで対応。



デジタル基板上にアイソレーション・トランス、アナログ基板上には出力トランスを搭載。真空管バッファーにはPCC88/6DJ8を採用している。

付属のリモコン。

EAR創始者のティム・デ・パラヴィチーニ氏は、プロとオーディオファイル向けの両モデルに独創的なアナログ回路を搭載している。それだけに、私はこのEARのD/AコンバーターDACute(ダキュート)の試聴に興味津々であった。

外観は美しいクローム仕上げ。同軸などデジタル入力の他に192kHz/24ビット対応USB入力を備え、プッシュスイッチで切替えられる。また、プリアンプとして使用できるようにボリュウムも装備している。内部で興味深いのは、D/A変換部とアナログ部の間にトランスを使用して、デジタル回路とアナログ回路の干渉を防いでいることだ。アナログ回路には双3極管PCC88と大型出力トランスを組み合わせ、アナログ出力(バランス、アンバランスの各1系統)する。このアナログ回路はオーディオ的な魅力がある。

本誌リファレンスのエアータイトA